

「日」本のマツタケ山は、あと二〇年もすればなくなってしまうかもしれませんよ」とシヨッキンクな発言をするのは長野県林業総合センターの特産部で主任研究員を務める竹内嘉江さんです。

昨年は豊作に恵まれたマツタケですが、今年の収穫は昨年の五分の一程度まで落ち込み、全国的にも不作傾向です。東京の築地市場では一キログラムあたり五〇万円を超える値段が付いたこともありましたが。これについて竹内さんは「今年はマツタケのシロが活動を開始する四月以降、降水量が多く気温もやや高めに推移し、シロの発達にとってはプラス因子が目立っていました。それだけ生産者も期待を寄せていたのですが、八月中旬〜九月中旬の一番雨の欲しい時期に少雨となり、シロが乾燥したことが影響し不作へと転じてしまいました。そのあと一〇月に入って台風が日本に二年ぶりに上陸し、まとまった降雨がありました。既に時遅しでした」と指摘しています。

このように天候頼みとなるマツタケについて、竹内さんは「マツタケ菌は、アカマツの根との間で微量栄養素を受け渡しています。シイタケ等の栽培きのこは基本的に寄生形態で、宿主の養分を一方的に奪い取って成長するため、培地を調整すれば人工栽培が可能ですが、マツタケはこの微妙なやり取りがあるため人工栽培が出来ません。マツタケ菌の繁殖地をシロと呼びますが、マツタケ山ではシロが健全に成長するように長期にわたって丁寧な管理されます。しかしながら、発生状況はというと、今年のように天候次第となつてしまします。それでも中には、不作を回避するため、除伐・間伐や腐植層の掻き取り等発生環境の整備を

緑のエッセー

長野県林業総合センター 特産部主任研究員

竹内 嘉江

たけうち よしえ
1958年名古屋生まれ。1985年信州大学農学部林学科卒業。1987年から長野県林業総合センター特産部に勤務して、シイタケ・マツタケ等のきのこに関する試験研究に従事。



行ったり、灌水を施すなどの手立てを講ずる人もいます」と説明しています。

では、二〇年後にはなくなってしまうかもしれないマツタケ山は、このような天候依存の特性と関係しているのでしょうか。そうではなく、全く別の要因があるようです。「マツタケ山の消滅は、松枯れでマツ林がなくなってしまうことによります」と説明する竹内さんは、「松枯れを引き起こすマツノザイセンチュウは、運び屋のマツノマダラカミキリによって媒介されますが、このマツノマダラカミキリの生息域が年々拡大しています。マツノマダラカミキリは標高の高いところには来ないといわれ、四〇年前までは松枯れの被害箇所は標高四〇〇メートル以下に限られていました。ところが二〇年前はこれが六〇〇メートル、そして現在は八〇〇メートルまで拡大してきています。既に京都府や広島県などでは、かなりのマツタケ山が消滅していますが、長野県の中信から南信あたりのマツタケ山は、そのほとんどが標高八〇〇から一三〇〇メートルくらいのところに位置するため、今のところ松枯れの被害に合わずに済んでいます。しかしながら、松枯れの被害が今までのようなペースで進めば、長野県といえどもマツタケ山が姿を消すことにもなりかねません。このため、関係者が一丸となって健全なマツ林の整備・保全を図るとともに、有効な防除法等の開発が急務となっております。今年、長野県では日本初のマツタケ山管理士認定制度を発足させ、放置されている山を整備してマツタケで収益を上げられるようにしました」と、将来に向けた取組の方向を語っています。